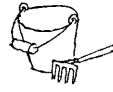


三才児保育の研究



森 崎 君 枝

一、はじめに疑問をもったこと

私共の園では三十数人の三才児を一クラス編成（教師二名）で保育していますが、当然のことながらさまざまな場面に直面しています。幼稚園での過し方を見ても活動的な者、傍観的なものと、遊びに対する興味の度合だけをとりに上げて驚くほど個人差があります。この年令では能力に強い個人差を示すことは普通です。しかし集団を対象とする生活の中にあつて、この個人差をどのように導いていったら良いのだろうかという、大きな命題をもちました。

ゲゼルの発達心理学に目をおすと、運動機能、感情と情緒、世界観などについて克明に成長の段階が記録されています。実際の保育にもかなり参考となることが多いのですが、しかしこれも在園児

に合致する資料ばかりとは言えません。環境や人質も違います。そこでやはり当園独自のものを、何らかの形で作製してみることがどうしても必要であると考えました。

二、三才児の成長の変化

現場から生まれた資料を整理することによって、三才児の成長の変化が把握できるのではなからうか。このことが実を結び変化と成長の限界を知れば、個人指導をする際にも個々の子どもに過剰にならぬ程度の誘導で導いていくことが可能なはずであると考え、三か年間の保育日誌を月別に整理して十二項目にわけってみました。わけた項目は、①全体の傾向、②運動能力、③生活発表、④お話、⑤質問による思考、感情の変化、⑥絵画、⑦製作、⑧粘土、⑨楽器、⑩遊びと競技、⑪ごっこ遊び、⑫園外保育ですが、これをまず項目別にふれてみますと、

① 〈全体の傾向〉 大泣きしていた子どもも幼稚園生活に徐々に慣れて友だちの存在を意識するようになってやがては二、三人のグループで遊ぶこともできるまでに成長し、まったく自己中心であったものがかなり他を意識してくるから、物事に気付いて自分で処理することもできるようになる。

② 〈運動能力〉 足を高く上げて歩くとバランスがくずれてふらつく。鉄棒を使用して前方回転を行なっても左の握力が弱く回転のさい離れそうになる。歩くとき左右の手を同時にふる子がいるな

ど、バランスをとることが困難である。一学期を経過し二学期の後半にはスキップも大分上手になり、やがてリズム運動にも手足の動きがとれない、身体の動きが軽くなり、良く動くようになる。

③ 〈生活発表〉 五月頃になると自分の言いたいことが言えるようになる。表現能力に個人差があるが友だちの話題にヒントを得て自分が話したがったりする。二学期の終り頃には発言したがらずともが多くなる。三学期には年令の小さい者の中にもはっきりした話し方がみられて良く喋るようになる、というように話題の範囲が広くなる。

④ 〈お話し〉 一学期間は何か対象物であったり、ごく短い話を聞く程度に終るが、二学期に入ると、話や童話をきこうとするようが見られるようになる。三学期になって本当に話に興味をもつようになり、放送童話を聞こうとする態度が、一層はっきりしてくる。

⑤ 〈質問による思考、感情の変化〉 六月になると、おとなの誘導により物を良くくみようとする気持がみられてくる。九月頃からは一つの物をみて質問する傾向がみられたり、自問自答して考えをめぐらすとか、ある物を見て自分なりに理由をつけようとする。三学期に入ると不思議に思ったことに対して原因を知ろうとするようになる。

⑥ 〈絵画〉 四月から缺は使用できる。一学期なかばになってから構成員がついてくる。二学期に入ると遊びに使えるものを喜んで作る。徐々に配色にも関心を示し、はっきりとした目的をもって作

ろうとする子どももみられてくる。三学期の教材を通して、種々々想をしたり、想像力がかなりついて来るので、構成員も複雑となり、個々の力がはっきり現われてくる。

⑧ 〈粘土〉 一学期はこねることに夢中であるものと、次々に形が変化していくのどがあり、またできた作品で遊ぶ。友だちの作品に誘発されて作る。粘土を切つて友だちに渡すなどして交流もみられる。十一月になり、見ただけで何を作つたか大體解るくらい、形づいた作品が多くみられる。三学期になって大半の子どもは、始めから目的があつて作る傾向にある。

⑨ 〈楽器〉 四月当初から身体で表現することを非常に喜ぶ。楽器を自由に叩くことにも興味をもつ。二学期になると音の高低、速度を聞きわかるようになり、既製の遊戯や鑑賞曲をきこうとする傾向もでてくる。三学期は、自由に行なう表現あそびを好むようになり、喜んでする。伴奏なしで唄うと、音程が低くなつたり歌詩の間違ひがある。

⑩ 〈遊びと競技〉 一人あそびで屋外あそびを喜ぶ。教師を仲間に入れてあそびたがる。集団あそびの多くは、ルールが理解できない。三学期は自分から遊びをみつけるようになって、活動的で友だちとの結びつきがだんだんはつきりしてくる。競技では勝負の意識は少ないが、集団あそびが保育に入れられるようになる。三学期に入るとグループになった場合、中心人物がでてくる。また活動範囲が広くなる。椅子取り、その他の集団あそびも大分理解してできるよ

うになる。

⑩ 〈ぐっこ遊び〉 二学期になってから、誰からともなく新聞配達ぐっこや、本屋ぐっこが始まる。椅子を使つての汽車ぐっこ、お家ぐっこも時により役割がきまる。狼ぐっこもはじまる。三学期、友だち同志だけで鬼ぐっこをしたり、海賊船ぐっこ、ケーキ屋ぐっこが始まり、積木などを材料に使つている。教師が誘導しての買物ぐっこにも、参加できるようになる。

⑪ 〈園外保育〉 一学期の終り頃になると、お弁当を持参で園外に行くこともできる。二学期に入ると、園外保育先での遊びにも発展的な行動や、目的をもつた行動がとれるようになり、夢中で遊んだり観察する傾向が強くなる。三学期になると、園では見られぬものに特に興味を示して見る。また行動が本当にしっかりして、他人のことに對してもかなり気がつくようになる、とあります。

三、発達表の利用方法とまとめ

以上のように、項目ごとにその変化を大きくとらえてまとめましたが、この縦の系列だけでなく、横の関連性についても考察してみることが必要であると思うのです。この記録は昭和三十一年のもので、現在とは多少点も異なりますが、この記録から得られた収穫には、かなり大きな意味がありました。

まず当園の子どもの特徴と合わせて、三才児の発達の変化とその速度が、おぼろげながら把握できたことです。そして、充分とまで

は行かなくとも横のつながりの中からは、二学期が成長の変化を示し始める時期であり、それ以後徐々に成長の変化をたどることがわかってきました。教師が設定する園外保育、ぐっこ遊び、競技に対する理解度のように、三学期になってからの成長に著しいものがあるものと、粘土、製作、絵画のように、行きつ戻りつの波形をとりながら、成長していくものがあります。

総まとめという点からみると、あせらず長い目で子どもの成長を見守っていく必要があること、背のびをさせた保育内容をとらなくとも、子どもたちは自分で素直に育っていく要素をもっているといふことでむしろ、幼児時代の情緒面に安定感をもたせて、表現力の豊かで明るく子どもらしい人物を作りたい。それには集団で扱っていても、そのなかにおける個人指導に、手ぬかりがあつてはならない、という結びのことはを得たのです。遊びの重要性を考慮した保育を行ない、良き人間像をはっきりもつて、幼児を育てることが必要であると考えました。

友をえようとする時期に入っても自己中心のであつたり、相手を受け入れる方法をしないため、和合することを知らない幼児に對する処置を、当然考えなくてはならないと思います。

四、小グループあそびについて

昨年試みたことです。四月から九月までの遊びを観察して、友だちあそびに入りやすい子ども十三名をだし、この子どもたちの一学

期間の個人記録のなかで、友だち関係にかんする部分を摘出し、あそびや仕事をしている際の傾向と、集団への適応の仕方です四つのタイプに分類しました。

簡単にこの形を述べると、(一)意図的に友だちに近づけても自然に離れてしまい、性格的にはのんびりとして赤ちゃんのところがある。(二)水あそびをしているとき、一番安定し一斉保育のときでも集りから外れて一人あそびを楽しんでいる。家庭では過保護でありわがままである。(三)自分のやりたくないものと拒否する。自分から話をしない傾向があつて、あそび、仕事の場で緊張感や不安感がある。どちらかというときあまり表情が豊かでない。融通性が少なく、他を受け入れにくいという芯の強さがある。(四)教師に注意されても、なかなか注意を聞き入れない。集合の途中から逃げだして、他のあそびに移るなど落着きがなく、行動的にも個性の強さがある。

この四つの形を示していた子どもたちも周囲の友を意識することのできる十月という機会をとらえて、小人数で遊ぶ時間をとり、そのなかで起る彼らの変化を記録してみました。

実験の条件のあらましを述べますと、通常積木の部屋として子どもに親しまれている場をとり、先の四つの形の者をここで自由に遊ばせたのです。また女兒のいることを考慮し、ゴザとママコトセツト一組も与えました。

五、小グループあそびの具体例

(一)のタイプの男児(A)の例を追ってみます。最初は教師の誘いがきつかけで、他の女兒と共に床にしている積木を運搬し、何気なく船を作る友だちの中に入りましたのに、他の仲間から「遊びに入れてやらない」といって大声でことわられました。それをみると屋外に出ていきました。二度目は一緒にいた友だちから誘われた形で電車ごっこのお客になり、それからお化け屋敷ごっこにも興味を向いて、電気のスイッチを自分から消すことを発案したのです。ところがこの発案を、誰も受け入れてくれない為、あそび仲間から外れようとなりました。そこで教師が口添して、仲間あそびを見ているうちに違った遊びを思いつき、次々にこの子どもは実行に移したのです。そしてこの日、園庭での遊び時間に、三名の仲間と犬の真似をしながら、積木の上からとびおろすことができました。

四回目の小グループ遊びでは、生憎と個性の強い子どもばかりの中に入ってしまった、A児のもっている楽しい着想は生かされなかったのですが、小集団のせいも、強い仲間の中にあつても、遊びの外側から自分なりの方法もちいて仲間に入ることを試みました。ことはであそびをリードし始めたのです。「早く乗りな、時間がないよ、発射の時間だぞ、みんなのつて、のり子ちゃんものつて」次にやっつと「入らせて」と発言し、友だちから許可を得るとロケットのつべんに乗って上気嫌で声を張りあげていました。

これは小グループを構成しての遊びが、プラスになったと見られる場面です。

六、小グループあそびから得たこと

集団にはいりにくい子どもたちは体力、家庭環境、遊びの場でも個人の発達段階なども影響しているが、自己中心的な遊びだけに満足して、友だちを求めようとする気持ちが起らない。家庭で赤ちゃんと、玩具的に扱うことも原因して遊びは平行あそびの程度にとどまっていること、小さいなりに自分の主義をもっていて、他を受け入れられる態度が少ない、やることに自信がない、極端な恥かしがりやで遊ぼうとする気持はあっても、仲間のなかに入っていく手段が上手でない、などと集団保育のなかでは見つけにくい一面が観察されました。また子どもたち同志が、気のつかぬくらいに小さい遊びのきっかけを教師が作ってやること、悪戯っ子のなかにみられる遊びの創意力を伸ばす機会を、身近かに求められるという利点があったと感じたのです。小さいグループということで、子どもたちが他を意識することが少ないという理由から、個人指導に力を入れることができる場で、教師と幼児が深く接しられる場として子どもたちに満足感を与えたとすれば、それだけでも、この小さな試みが成功したのだと考えます。けれども三年保育の一年目であるという見通しの上にたつて、指導することが前提となり、それに加えて(一)から(四)までのタイプの子どものどう組み合わせるかによって、子どもたちの欠点をあらためて発見したり、遊びへの参加意欲を起させるきっかけを作ることができた、などの効用はあったのです。

保育体制の一つとしては、担任以外で三才児保育経験を有する教師が、新鮮な目で遊びその他を観察する時をつくり、意見の交換をすることも、保育内容向上のうえにも必要なことで、どんなに小さい実験であってもそれにはかなりの努力と根気が必ずともなうものです。クラスの担任があつて、その中で実験できること、そして直接保育に役立ち今すぐにでもその効用を保育に盛り込みたい、いろいろと欲の深いことを思いながら自分の考えを実行に移し、研究あるいは確かめの意味をもって行なうことのなから、次への保育にプラスする物を求めていくことが良いと考えます。

子どもたちの製作活動はりっぱな物を作りあげるといふ目的よりも、そのことに付随しておこる製作態度や創作力をつける、根気力を養うなどその過程に大きい意義があると言われていることによつて、あいだの経過やテストを行なおうとした目的、実験にあつた条件も大切にする必要があります。このあいだに教師が子どもの変化について判断する力、観察記録をとることも習得し、それに伴い文献を読む機会ができるなど教師側の収穫もあります。自信に満ちた気持で保育することも必要ではありますが、自信をなくすということでもなく、自分がしていることにある程度の疑問をもつこと、子どもの活動から一步引ききがついた位置で、子どもの生活実体を望めるゆとりが欲しいものです。疑問を発見するという見方、それに疑問を解く態度と、教師が保育理論を納得のいく形でとっていく力があいまつていかなければなりません。

前述した実験が充分な段階に登りつめないうちに、三才児の生活のなかから新しい疑問が起ってきたのです。

七、新しい疑問の上になつて（近年の三才児の傾向）

どの点かと、強く指摘する具体性はないのですが、どうも近年の三才児はおとなっぽい面が感じられるのです。それに加えて、園の三才児が二クラス編成になるとクラスの特徴、つまりクラス性ということが問題点として浮きあがってきたのです。そこで()の点について当園で行なつた過去の記録(昭和三十一年のもの。先にも述べたように保育日誌から整備しまとめたもの)の、表のうち全体の傾向という項目をとりあげ、昨年の三才児A及びBクラスの内容とを比較検討してみました。

八、差異が認められた点について

四月では総体的に泣く期間が短縮されていることが、近年の三才児はしっかりしていると感じさせる要素になっているのではないでしょうか。

六月、席の近所という身近かな範囲から友を得るといふ傾向でなく、ままことあそび、公園での遊びなどと広い場所や大きなまとまりを示している所からでも平気で、身近かしてきた子どもと触れあいながら友を得ていく者もいて、友たちを作るための場に出できたといえるのです。

七月、過去の記録が一新された形で今回は「泣く人が出てくることがある」の内容に類した記録がなく、ここでも以前よりも泣く期間が減少してきたのではないかと思つたのです。

十月と十二月、旧年より遊びのなかにも知識欲が早く現われ、あそびもかなりまとまつたものが始められて、その中に相互関係が成りたつてくるとか、組織的になるといふ記録がみられて友だち関係の交流にも向上があるのではないかと考えました。

ここに記述しなかつた月は従来と成長の変化が類似していました。六領域別にみると差異が認められるのかも知れませんが、全体の傾向からだけ検討した結果は、三才児がそれほど高度な形で成長してしまつたわけでないと思つたのです。

二学期になるとやうと知識欲らしいものがみられて、自分で作つたもので遊べるところまで成長し、自主的な活動を起す段階に入つてきます。三学期になつて自分たちから自然現象の変化に気付くとか、目立って意志表示がはっきりすること、お喋りが盛んになる、あるいはお手伝いで自分に与えられた事をするのを喜ぶなど、この頃になると自立心が出てくるのです。このようにゆっくりとしたテンポで成長していく姿を見ると、ここでもあせらずたゆまずの法則にそつて、人間形成の土台となるこの時を間違ひなく過ごさせたいと感じます。

九、四才児に移行してからの問題点

移行してからの変化と家庭との関連性がここで問題になってくると思います。そこでCクラスの移行後のことを指導要録の欄からとりあげます。

三才児時代と同じという内容についてみると次のようです。判断力に乏しい、依存的な気持が従来から強かった、意欲が少ない、素直さの少ないところがあった、集中時間がことに短い、機敏さが少ない、口数が少ない、日常の生活習慣が身につかない。

良い方向に変化した内容としては知的能力が充たされるようになった、ねばり強さがある。他の人の動きにつられて自分の判断が生かされない状態であったものが、話をきく、作る、絵を描くことにも集中がみられてきたなど、三十五名のなかで十五例があります。

三才児時代と同じという事柄についてみると、いつも依存的である態度を示しがちであった子ども、性格的にみて欠陥があると思われるものとの二つにわけられ、三才の時なかなか家庭との協力が得られなかった者がその大半を占めておりました。また欠陥の原因が教師側にもどうしても把握できなかったものも含まれていたのです。

十、母親とのつながり

母が子どもに接するときの教育態度を、担任教師が判定したものと、子どもの日常生活態度を照合してみると、神経質に物事を考えすぎたり教育に熱心すぎる家庭では、子どもらしさがなかったり、自分で判断したことを行動に移すことがスムーズでない傾向が現わ

れています。また関心があっても手が行きとどきかねる家庭と、大ざっぱで躰や教育にあまり気を使わない母親とが総体的にみて、子どもの生活態度にだらしのないところが見られておりました。教師がみて好ましいタイプであると判断されるもの、それは子どもらしい明るい性格で、遊び仲間のなかでも自分の能力をだせているものは以外に少なかったのです。

子どもとその父母の性格と素質にもよると思いますが、このような家庭の多くは子どもの成長速度にあわせて、ごく無理なくのんびりと育てている共通点を母親がもっているようです。そして生活習慣や身じまいについて充分に手をかけていることがわかりました。

十一、おわりに

子どもの成長変化など種々の実例を総合すると、保育という仕事にはどうしても家庭の協力がいるということです。三才児というこの年齢が将来の基盤になることを忘れず、子どもを観察すること、実験に当る場合でも一方向から眺めるのではなくつねに多角的な検討が必要で

発生した疑問を一人で処理することもよいのですが、更に学究的な新しい知識を得て充実させるためには、知識人また専門教師の力をえて問題点の解決に取り組むことも、私たち現場の教師には必要なことです。また現場の記録や現実の現象をみのがさないことが、保育のもっとも大切な基礎になると考えております。(神田寺幼稚園)